

この20余年間、胃の内視鏡からはじまって食道・十二指腸・小腸の内視鏡へと、わが国の消化器内視鏡学会の研究陣は国際的に引きつぎ指導的役割を演じてきた。さらに大腸の内視鏡診断学についても、弘前大学松永藤雄教授らを先達として早くから研究が進められてきており、とくに大腸カメラと大腸ファイバースコープの開発、腸管深部への挿入法、生検材料採取法、撮影、記録法などについて輝かしい業績をあげている。

今回、消化管内視鏡診断学大系の第10巻として大腸の部が刊行されるに至った。本巻は、関東通信病院故内海 胖博士と 東大内科丹羽寛文博士らを中心にして、わが国の第1線の内視鏡学者19名によって執筆されている。全300余頁の中に、大腸内視鏡の歴史・器種・検査法、良性腫瘍・癌・潰瘍性大腸炎・非特異性大腸炎・肉芽性大腸炎・憩室症・赤痢・結核その他の内視鏡学的診断が記載されている。そして、内視鏡像を主とした200余のカラー写真、それらのシェーマやX線像200余、表60、文献300余などが附属している。

本巻は、大腸内視鏡の開発に努力した諸権威と、内視鏡検査の実地に

□書 評□

消化管内視鏡診断学大系 10

大 腸

編集責任者

内 海 胖

(元関東通信病院部長)

丹 羽 寛 文

(東大医学部第1内科)

東京大学教授・外科

石 川 浩 一

当る学者らが、それぞれの豊富な経験をもとにして、直腸鏡・大腸カメラ・大腸ファイバースコープの器種・検査法を、開発時の苦心談を折り込んで詳細に記述している点にあらう。ことに大腸ファイバースコープについて、性能の向上、挿入手技などの工夫、粘膜面観察法、検査の適応と禁忌、偶発症、生検と細胞診、などの記載はこの方面に進む医学者にとってもっともよい指導書となるであろう。また、大腸癌・潰瘍性大腸炎・赤痢・回盲部病変などがとくに豊富な経験を基に詳細に記述されており、消化器病学にたずさわる者にとって必読の書となっている。

従来、大腸に特有な疾患とみなさ

れる腺腫・癌・潰瘍性大腸炎・肉芽性大腸炎・憩室症などは欧米にとくに多く経験されており、わが国ではあまり注目されていなかった。したがって、大腸疾患の診断基準・病理・臨床・診断治療などは欧米で早くから報告され、とくに、ロンドンの Morson 博士など他の追従を許さない見解を発表してきた。また、たとえば、近刊のドイツ国 Demling ら編集の Atlas der Enteroskopie をみても、計1,098例の豊富な資料が取扱われている。

本巻をみても、腺腫・肉芽性大腸炎・非特異性大腸炎などの記述がやや簡単になっている、内視鏡カラー写真はシェーマなしでよい位に鮮明でありたい、内視鏡診断を中心にして大腸に特有な疾患を解説してもらいたい、など、今後に対する注文も少なくない。

いずれにしても、本巻は何といってもわが国の大腸内視鏡診断の輝かしい業績と高い水準を世界に示すものであり、消化器内視鏡診断についての貴重な専門書といえる。

B 5 頁316 図270 写真182
原色図235 罫28,000 千200
医学書院刊